

背景

「小さな崖」の向こう側の障害者施設



徐々に分断されていく台地の療育センターと低地の周辺地域



高低差を行き来する農村共同体

現在の療育センターが発足する

境界を越える取り組み

薄れていく地域とのつながり

取り戻される気配のないつながり

「小さな崖」の課題とポテンシャル

台地と低地の分断



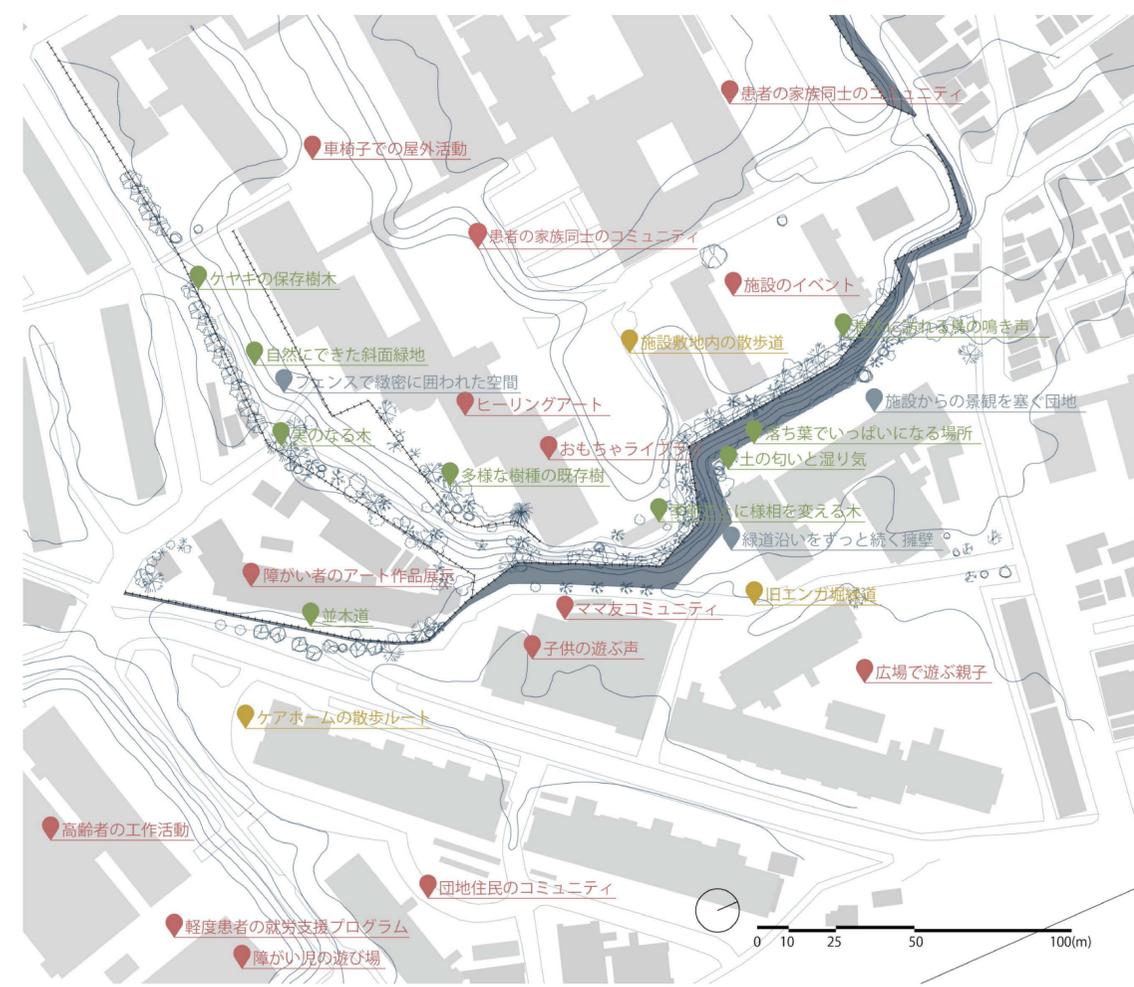
内なるアクティビティ



豊かな自然資源

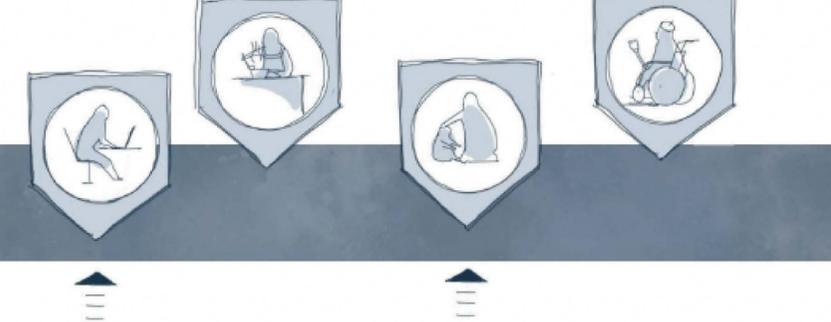


点在する散歩道



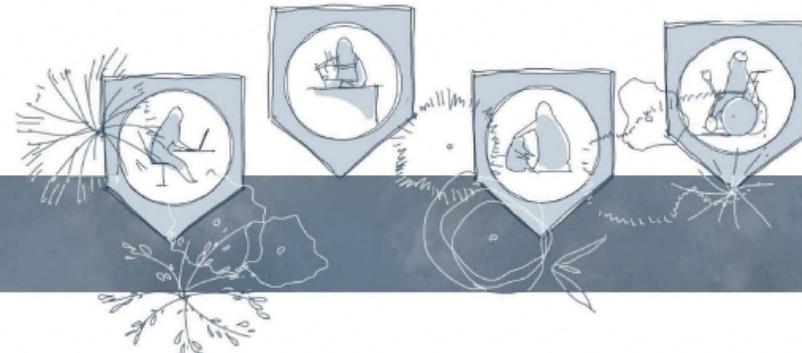
1. 引き出し集める

内にもったアクティビティや失われたアクティビティの受け皿を崖沿いに作り、引き出してくる。



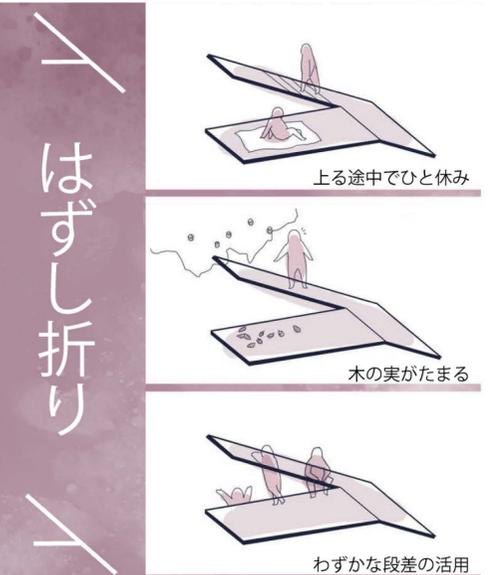
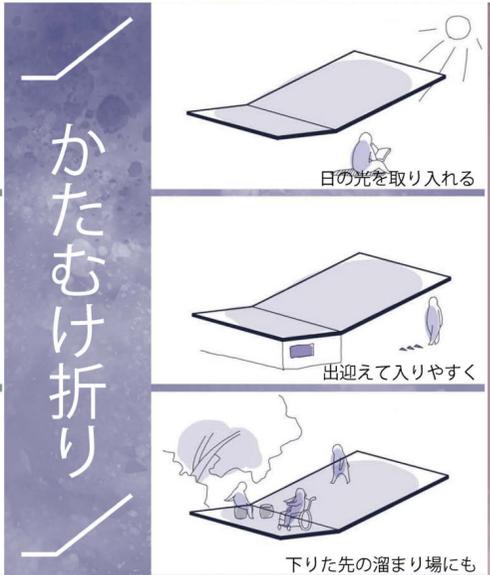
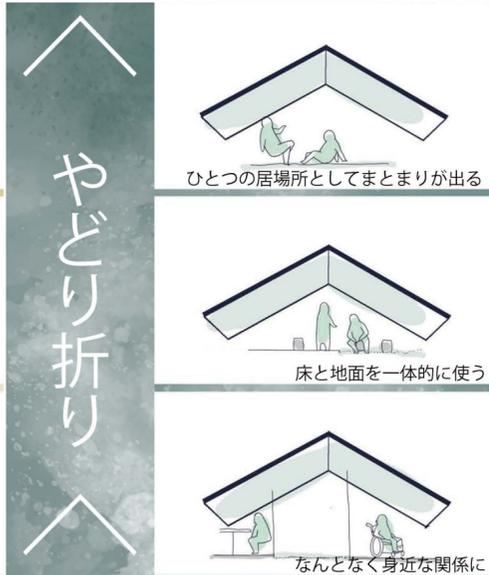
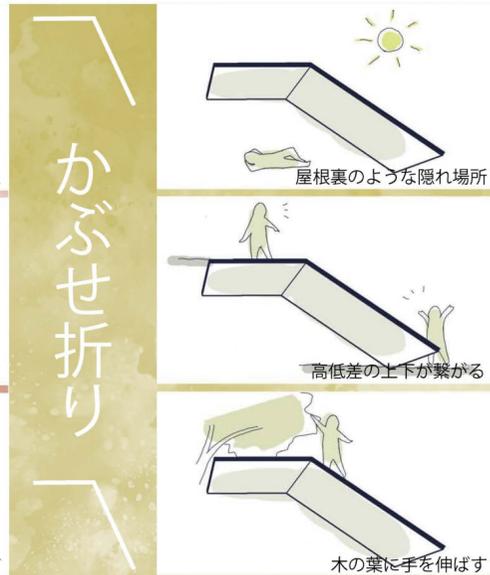
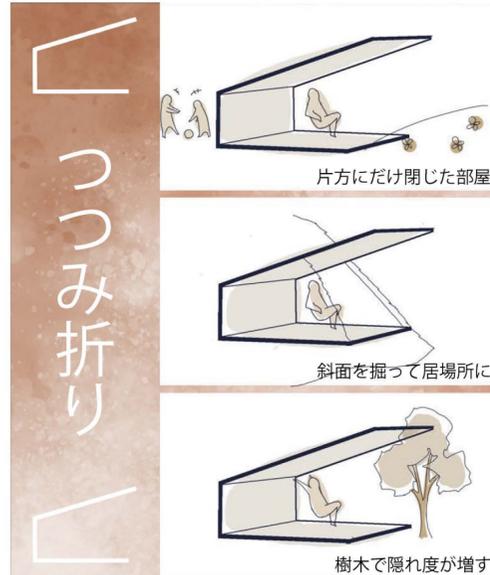
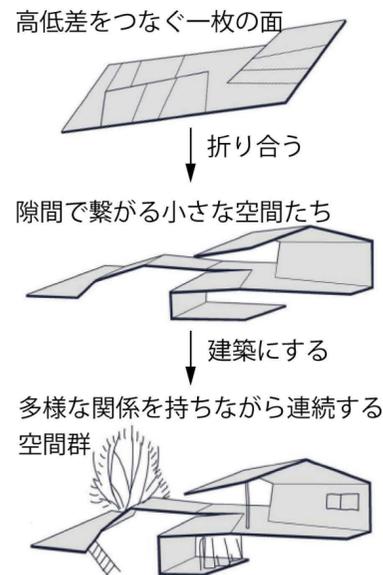
2. ぼかす

豊かな自然資源によってさまざまな距離感を内包することで抵抗感を減らす。



3. 違和感のない関係

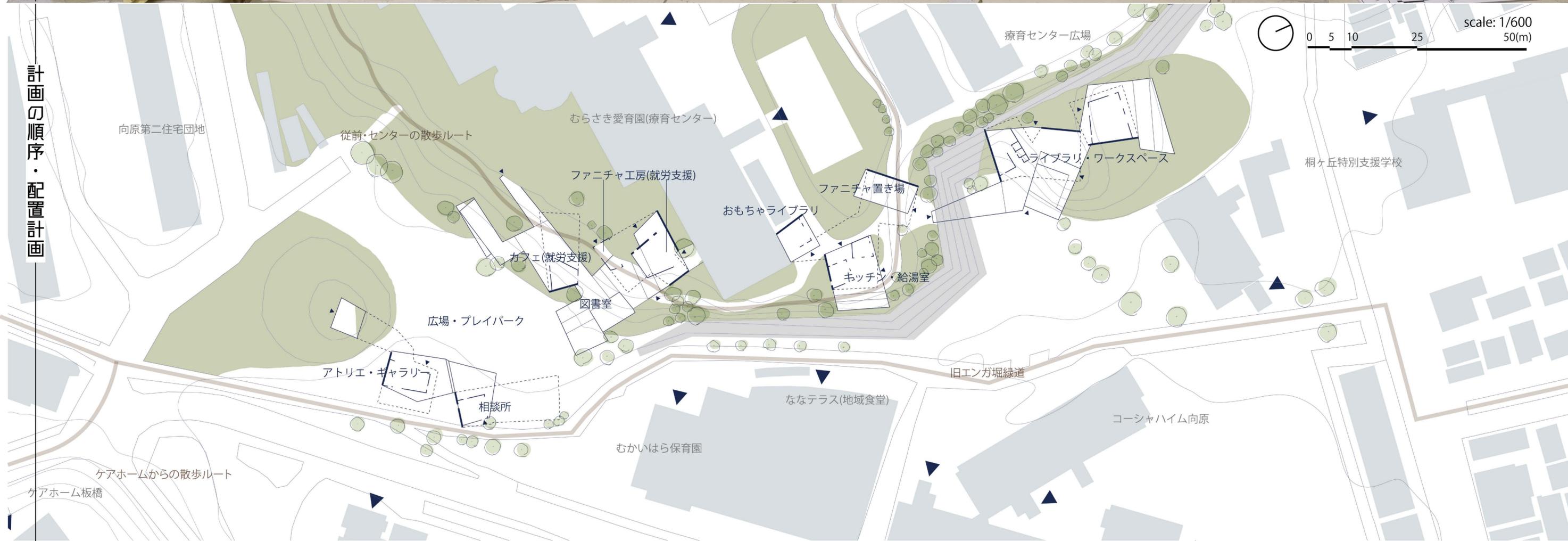
今まで目にする事のなかった人たちの暮らしぶりが日常的に目に入り、隣にいても違和感のない関係が育つ。



高低差を乗り越える「折り合い」を組み合わせたカタチ



計画の順序・配置計画



ゆっくりと距離を縮めていく



第Ⅰ期：散歩道を引き出してくる

旧エンガ堀緑道や保育園の隣に広場を設け、子供たちの遊ぶ声を敷地内に取り込む。フェンスに囲まれていたセンターの散歩道は広場に近づいたり下りたりできるようにし、施設内での展示に限られていたアート作品を緑道に見せる。

第Ⅱ期：就労支援プログラムの開始

施設利用者の散歩ルートと、地域住民や子供たちが接点を持つようになる。慣れ親しんできたなら、その散歩ルート沿いを働く場として使い、作ったファニチャを地域住民が使うなどしてさらに関係性が深まる。

第Ⅲ期：より多くの世代を取り込む

崖上からの景観を圧迫していた団地の棟を撤去・減築する。子育て世帯や施設利用者だけでなく、周辺の学生や団地住民も使えるようなライブラリ・ワークスペースを計画し、低地から崖上に近づくルートともなる。

第Ⅳ期：施設の一部を一般開放

かつて開放されていたおもちゃライブラリの一部を、崖上に再び開放する。北側からは団地の子供が、南からは広場にいた子供が訪れる。誰でも使えるキッチン・給湯室も開放することで、子供に限らず地域住民と施設利用者が空間を共有する機会ができる。

境界をまたいで、のびのびと。

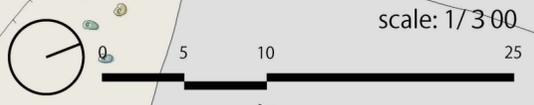
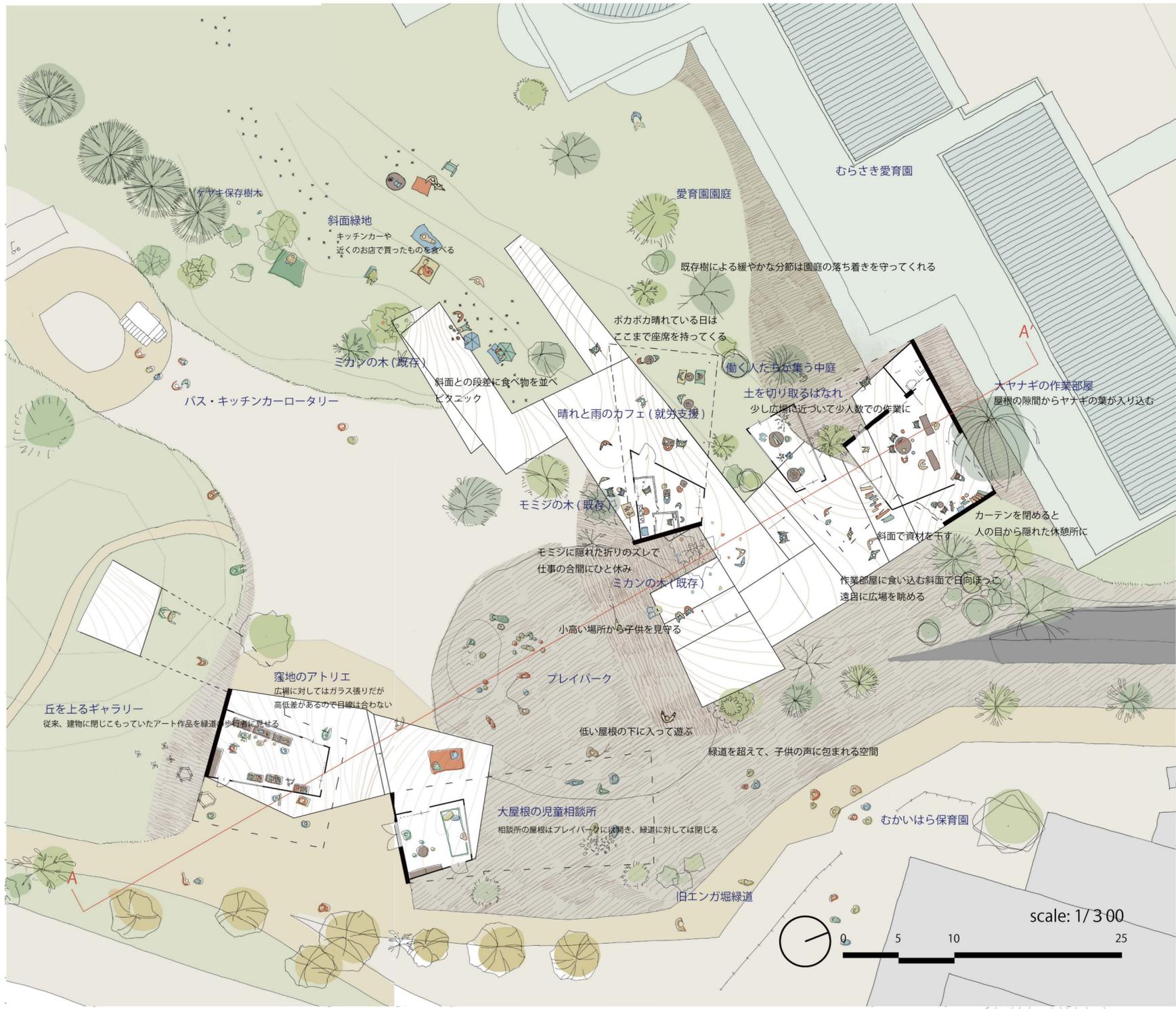
完全に閉じ切らず外や隣の空間とつながることにより、天候や季節によって使われ方や表情が変わる。これまでのような明確な境界でなく、流動的で曖昧な境界によって空間を分け合うことは、人々を自然と隣に腰掛けるような関係性へ解く足掛かりとなる。



暖かい日の「晴れと雨のカフェ」。床のエリアを超え、芝生のほうまでファニチャーを持っていきのびのびと過ごす。

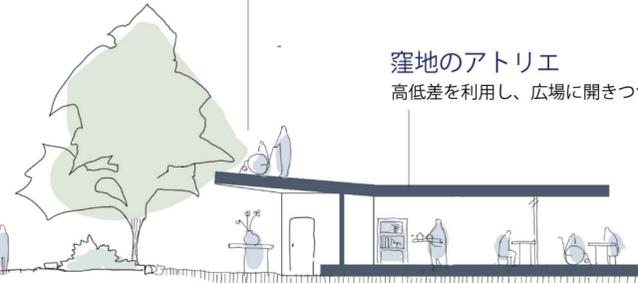


雨の日は室内に座席が閉じこもり、カフェの従業員と利用者の距離が縮まるとともにいつもより視界がひらける。



旧エンガ堀緑道

延長した散歩ルートで、イチョウの既存樹に手を伸ばす。



地域住民がゆっくり歩く緑道沿いをアートでいきいきさせる。

窪地のアトリエ

高低差を利用し、広場に開きつつも目が合うことなく作業できるアトリエに。

プレイパーク

折り合いの端の形が囲み、見守られる。

土を切り取るはなれ

土の地面だけど壁のある、小さな別棟。

晴れと雨のカフェ

大ヤナギの作業部屋

むらさき愛育園

広場やカフェの人々を眺めながら、少し距離を置いてリラックス。

モミジの図書室

小高く掘りこんだ図書室で、子供が遊ぶのを待つ。

AA' 断面図 scale: 1/200



